

名古屋市守山区上志段味の古墳群に関する構造的考察

Structural Consideration on Tumuli in Kamishidami, Moriyama Ward, Nagoya City

犬塚康博

INUDZUKA Yasuhiro

要旨 名古屋市守山区上志段味では、古墳時代を通して造墓がおこなわれた。前期の大型前方後円墳1基を含むことから、その地域(ローカリティ)の造墓だけではない、広域(トータリティ)のそれとして世人の感興を惹き、旧藩領程度の「国」を幻想させてきた。上志段味におけるローカリティとトータリティの二項に関する理解は、二系列として、トータリティにローカリティが従属する関係として、トータリティー辺倒として、従来とらえられてきたが、本論は、一つに内在するローカリティとトータリティの二項の矛盾の運動として、この地域の古墳時代史を構造的にとらえかえすものである。墓域に注目し、方法的に東谷山山峰と東谷山西麓段丘とに分ち、当該造墓集団をしてトータリティ、ローカリティがいかに表象せしめられたかを追った。その結果、ローカリティとトータリティは複雑に盛衰し、トータリティにおいて上志段味が後景化してゆく理路の一端を知り得た。

1. はじめに

名古屋市守山区上志段味の古墳群の変遷について、久永春男は、「白鳥塚古墳は特別な事情によってこの地に营造されたが、尾張国全体を基盤として考えるべき古墳の一とし、尾張戸神社古墳→勝手塚古墳という系列を、連綿と連なった地域的推移と見ることもできよう¹⁾」と提起した。ここに立てられているのは、「尾張国全体」と「地域的推移」との二項である。久永の用いた語「全体」をトータリティ、同じく「地域」をローカリティと抽象するところから、本論をはじめてゆきたい²⁾。

白鳥塚古墳は、愛知県西部における大型前方後円墳のひとつである。狭義のローカリティのみによる理解を逸脱するリアリティが、久永に感受されたのであろう。「墳丘の規模における断層³⁾」の文言が、このことをよく物語っている。そこに措定されたのが、広義のローカリティ、すなわち狭義のローカリティを統合するトータリティたる「尾張国全体」であったと理解できる。

さて、久永に依拠して考えを進めるとき、「尾張国全体」と「地域的推移」を、二つの「系列」としてのみならず、一つに内在する二項と見るべきことにうながされてゆく。白鳥塚古墳を、「尾張国全体」と「地域的推移」、トータリティとローカリティの二項に内在する主体としてとらえるということである。

これは、「尾張国全体」と「地域的推移」とが平衡しておらず、二つの「系列」たりえない二項であることを識るところから来している。「地域的推移」の「地域」とは、ここでは現在の上志段味——古墳時代の当時どのように呼ばれたかわからないが——に限定され、具体的である。一方の「尾張国全体」の「尾張」は、地名、人名にかかわる固有名詞として現在流通しているが、白鳥塚古墳築造に遅れて登場すると思われる概念であり、仮に築造当時に存在した場合も、その意味するところは厳密には不明である。そして「尾張

国全体」の「国」は観念であり、それゆえのデラシネ性を不可避とする。精神的には、近代の領域国民国家幻想の投影と言うこともできよう。このように久永には、「地域」の具体、「尾張国」の抽象という不均衡が備わっているわけだが、これを一つに内在する二項へと読みかえることにより、学史における持続的な検討を試みたいと思う。

さて、古墳の造営集団は造墓活動において理解される。造墓活動は、構造的に古墳それ自体と古墳を擁する墓域にある。墓道も含まれるだろう。そのうち古墳自身の属性は、古墳文化中枢からの遠近を示すことに利されやすく、古墳自身から「尾張国全体」と「地域的推移」が帰納されることは稀である。中枢からの遠近が、「尾張」であったりなかったり、「地域」であったりなかったりする倒錯は、最近の事例がよく示している⁴⁾。

本論は、墓域に注目する。トータリティとローカリティに内在する当該集団をして、トータリティ、ローカリティがいかに表象せしめられているのか。この問題意識に即して、地域の歴史的発展の理路を構想しようとするものである。必要に応じて、古墳自身にも言いおよぶであろう。なお、以下では、「トータリティとローカリティに内在する主体のトータリティ」ならびに「トータリティとローカリティに内在する主体のローカリティ」とそれぞれ書くべきところ、煩瑣になるためこれを避けて、単に「トータリティ」および「ローカリティ」と書いてゆくことにする。

2. 東谷山山峰の墓域と東谷山西麓段丘の墓域

1) 尾張戸神社古墳、東谷山山頂遺跡

上志段味において、白鳥塚古墳と相前後する時期の古墳は、東谷山山峰（図1・2）と東谷山西麓段丘（図1・3）とを墓域にしている。山峰に尾張戸神社古墳（名古屋市守山区、瀬戸市）、中社古墳、南社古墳があり、西麓段丘に白鳥塚古墳がある。これら4基の古墳の密接な関係は、早くから想定されてきた。山峰と西麓段丘は、直線距離で最短約600m離れ、比高差は100～140mほどある。これまで両者は同一視されてきたが、本論は方法的にこれを分離して考察を進めてゆく。

この点について一言触れると、吉田富夫は、東谷山と庄内川対岸の高座山とをあわせたこの地に、奈良県桜井市の初瀬山との類似から「こもりく」を想念し、「こもりくの」の枕詞をそのままに、それより奥は霊界の仙境であり、その隠れがの入口こそは、まさしくうつしみの棄てどころと考えられたのであろう⁵⁾と書いていた。吉田によれば、山峰の東側すなわち「奥は霊界の仙境」であり、西側は「うつしみの棄てどころ」となり、山峰は両者の境となる。

さらに真木悠介の指摘する、古代における時間が、「昼夜」「季節」「生死⁶⁾」といった「対極間の矛盾として表象されることの帰結は、過渡期がひとつの危機であること⁷⁾」に学ぶとき、仙境と俗界は空間的に表象された時間であり、二つの世界の境である山峰は、空間的に表象された過渡期つまり危機として感覚されていた可能性にも想到する。吉田と真木の参照による収穫は少なくないが、ここでは、東谷山をめぐる山の奥、山峰、西麓という構造の社会学的背景の示唆にとどめ、山峰と西麓段丘とを分離して考察してゆくに際しての参考としたい。

本題に戻り、山峰から見てゆこう。東谷山の最高所198.3 mを示す三角点は尾張戸神社



図1 名古屋市守山区上志段味古墳分布図（約1/11,764）

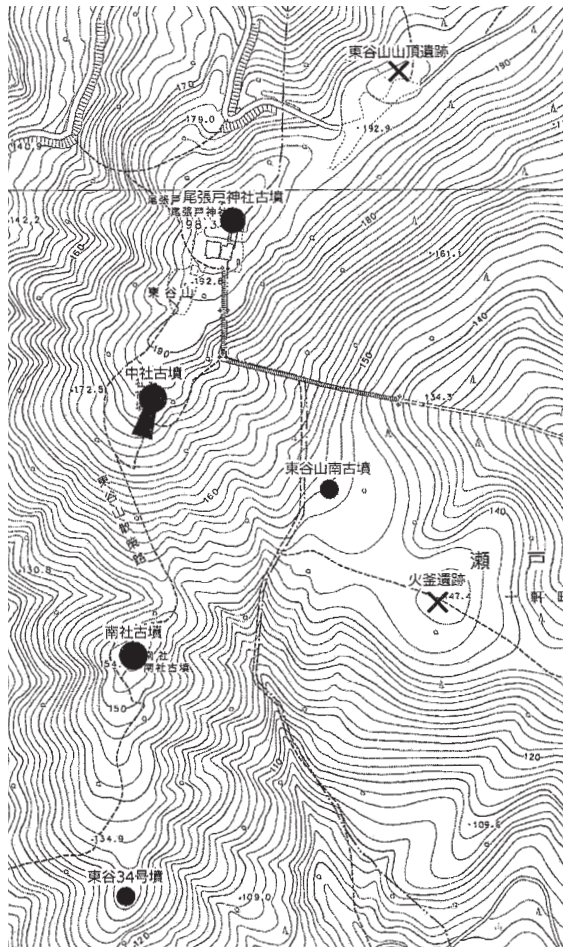


図2 東谷山山峰の墓域図（1/5,000）

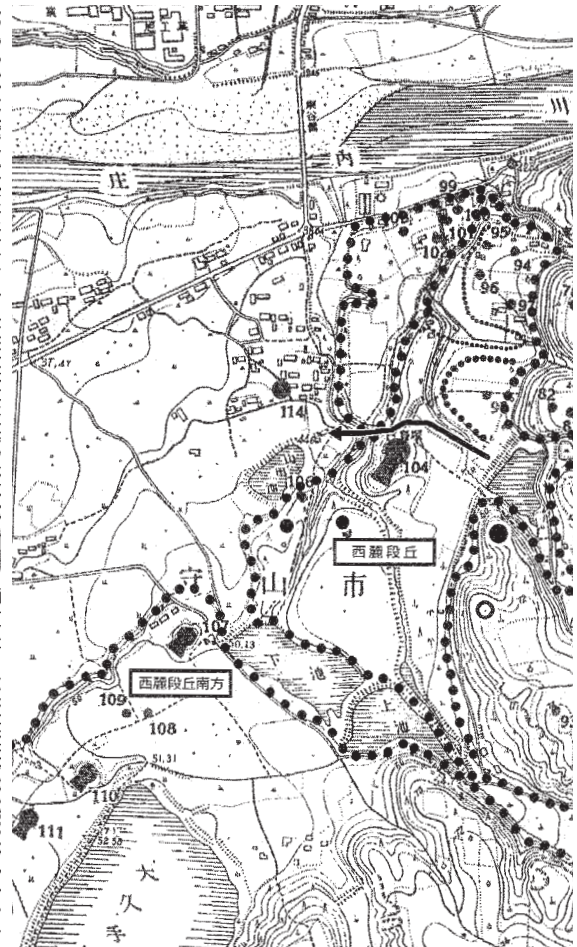


図3 東谷山西麓段丘の墓域概念図（約1/10,000）

境内にあり、尾張戸神社古墳頂部の標高となる。山頂の192m等高線にかこまれた平坦部は、北東から南西にかけて約400mと長く、その北端、中央、南端に194m等高線のめぐる高所がある。そのうち、196mを超える標高の南端に、尾張戸神社古墳が築かれている⁸⁾。この立地の動機については、山頂平坦部の南端が最高所であり最西部であることにより、西方の眺望、あるいは西方からの遠望をよくすることを想像するのは容易い。ただしそれは、造営当事者の「目的」にかかわる性格が強く、「理由」は別に求めなければならない。

理由の第一に掲げられるのが、弥生時代後期後半の高地性遺跡、東谷山山頂遺跡（瀬戸市）の存在である。山頂平坦部のほぼ中央に位置し、弥生土器の台付甕、高杯、壺などが出土しているほか（図4・5・6）、焼土粒、炭化物の散布が見られる。1979年度の名古屋市教育委員会の遺跡分布調査時には、時期不明ながらチャート製の石鏃も採集されていた⁹⁾。

この場所にこそ古墳は営まれたのである。時間差を承知したうえであえて言えば、山頂遺跡と古墳は、歴史社会的一体性のうちに存するかもしれない。

かつて筆者は、次のように書いた。

さらに、瀬戸市の東谷山山頂遺跡から見渡すことのできる、広義の庄内川の兩岸一帯は、弥生時代後期後半の緊張した社会において、戦略的要素をはらむ地域へと化して

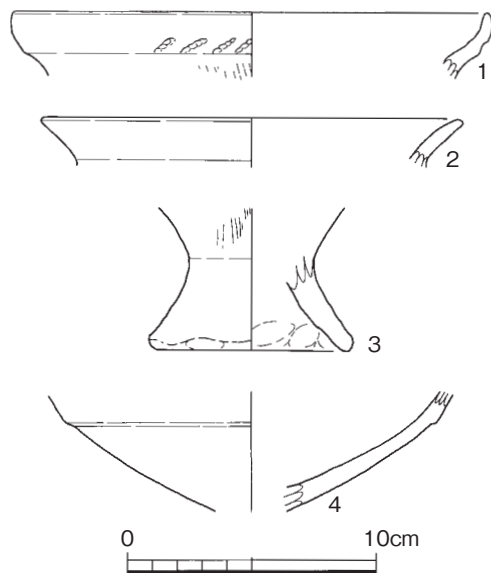


図4 東谷山山頂遺跡出土
弥生土器実測図（1/3）



図5 東谷山山頂遺跡出土弥生土器（1）



図6 東谷山山頂遺跡出土弥生土器（2）

いたことを暗示している¹⁰⁾。

これを受けて、「尾張南半部で最高所に位置するこの高地性集落は、当時における内乱の証左であり、さらに緊張関係を総括的に睥睨する点において、物質的に超絶し、特殊である¹¹⁾」と書いたのは、最近のことである。

山峰は、墓域形成以前、古墳造営以前に、内乱を総括的に睥睨する超絶、特殊を体験していた。本章冒頭の参照に続けると、対極する時間空間の過渡としての山峰に対する危機の感覚と、現実の内乱から来す平時と戦時の境の危機とが、象徴的に重ね合わせられて山頂遺跡は存在すると言えるだろうか。ここに、山頂遺跡の宗教性と政治性もある。

それはさらに、「過去に向かう現在、あるいは過去と未来と現在がそこで一点に収束する〈時〉に向かって求心する上代のひとの時間¹²⁾」という真木の時間論を援用するとき、伊藤禎樹が東谷山に想定した古墳時代の地域首長の国見¹³⁾とは、天下大乱と緊張緩和、戦時と平時とのあいだの危機感に生じた山頂遺跡という過去と、国見すなわち予祝する稔りという未来、そして国見する現在が、「一点に収束する〈時〉」に相当する。伊藤が言った東谷山の「聖なる山・霊山¹⁴⁾」の意味も、ここに還元されるであろう。

それは措いて、山頂の超絶と特殊を保証するものが、墓域形成であったと考えることができれば、ここでは十分である。山峰は、平時の集落域たりえない。そうした場所の特性を担保してゆくものとして墓域はあり、目的的にも絶好の場所に尾張戸神社古墳が設けられたと言える。

なお、東谷山東南側尾根上には、弥生土器と石器、土師質円筒埴輪片を出土した火釜遺跡（瀬戸市）が知られている。「瀬戸市側の尾張戸神社氏子によって、倒木の跡から遺物が採集された¹⁵⁾」と教えられた。これも高地性遺跡であり、山頂遺跡と無縁ではない。しかし、山頂より50mほど低所にあり、西方の濃尾平野に開けていないその立地を考慮するとき、山頂遺跡の超絶、特殊に対して二次的、または異なる位置をしめていたように思われる。よって、注意をはらったうえで本論の考察からは除外して、後考に備えることにしたい¹⁶⁾。

2) 白鳥塚古墳

白鳥塚古墳は、ローカリティとトータリティの矛盾、普通と特殊の矛盾を止揚するかのときであった。まったくトータリティであり、久永の言う「尾張国全体」が支持される。

全長100m超、後円部径70m超の規模の前方後円墳が、最初から求められたのであろう。それは、実体的な体制、制度と言うよりはむしろ、物象化された大型前方後円墳としてである。これが求められたものの、それを可能とする場所は東谷山山峰の墓域にはなかった。かくして、東谷山西麓段丘が造営地となる。ここにあるのはリアリズムである。白鳥塚古墳の立地が、段丘平坦面の北寄りだったのは、山峰墓域にもっとも近い場所として選ばれたためと考えておきたい。

地勢を見ると、白鳥塚古墳の立地する段丘には、幅の狭い水系が三つある。(1) 東谷池（口明洞池）からの水系、(2) 大矢川、(3) 字寺池と字洞田との字界の水系、である。西麓の谷地形は、東南から西北方向に向けて開口することを基本とするが、三つは様相を異

にしている。上流から、(1)は北西—北北東—北西—北北東—北西と屈折し、同じく(2)はほぼ北向し、(3)も下池から北北東に向かう。このうち(2)が、白鳥池・馬舟池の余水捌けとして知られているが、(3)もまた位置、形状から下池の余水捌けと考えられる。

(1)は、尾根の末端に沿っているようすに自然の感を見せるが、クランク状の形態には人工の印象が強い。

(1)は、東谷池からの水を流す水路である。東谷池の上流には、少なくとも2箇所の湧水地点が知られ、西麓のなかでは水量をよく有する谷であった。クランク状の水系が人工であり、後世に開かれたものであった場合、谷の水は本来どこへ流れていたかが問題となる。先に述べた西麓の谷が東南から西北方向に開口する基本にしたがうと、東谷池のある谷の水は、白鳥塚古墳の西側、山の田池の東北東、段丘崖がノッチ状を呈する場所に向かって流れていたのではないか。つまり、東谷池の谷を出た水は、北東の尾根に遮られて西に進み、ノッチ状の箇所へ進んで段丘下に落ちたことになる(図3、実線の矢印)。この想定に大過なければ、白鳥塚古墳の後円部北側は、その水系の谷を利用すなわち埋めたか掘削したかして、その箇所の周濠とした可能性が出来る。

ところで、段丘上に、全長100mを超す前方後円墳を造りうる場所は、その縁辺にかぎってもほかになかったわけではない。寺山1・2号墳のある場所が該当する。しかし、白鳥塚古墳は、段丘上北寄りを選んだ。古墳北側の尾根の先端(図3、54m等高線)を避けたとすると、段丘上平坦面の最北端となる。ここに位置するのは、先述した山峰墓域への接近に加えて、自然景観の借用があったのではないかと思われる。つまり、ノッチ状の場所は、北方から別々に続いてきた高低二つの段丘が一つに重なり、高い崖になるため、この上に墳丘を築いた場合、西方からの見かけの高さは強調される。また、ノッチ状の場所から南に続く段丘崖はなだらかであり、ノッチ状の箇所は地形の緩急の変更点となっている。この場所に乘る古墳の視覚効果は、エッジが効き、減り張りが出るであろう。

この自然景観の借用が首肯されるならば、北高南低の東谷山に相似する形状において、仰角の大きさによる高度において、白鳥塚古墳は二重にトリッキーだったと言えるのではないだろうか。さらに、トータリティ表象の本質がトリックにあったことにも想到するのである。

このような形而上下の選択の結果として白鳥塚古墳を理解するとき、全尾張的に造営された白鳥塚古墳もまた、東谷山山頂遺跡—山峰墓域—尾張戸神社古墳と同様に、ローカリティとトータリティとの矛盾に内在したトータリティ表象だったことになる。そして、圧倒的なトータリティに偏して、次の段階を迎えてゆく。

なお、前後するが、白鳥塚古墳を上志段味の古墳群の契機墳とみなすことが、これまでよくおこなわれてきたが、尾張戸神社古墳と白鳥塚古墳の先後関係は、現状で厳密にはわかっていない。しかし、東谷山の歴史社会性すなわち山頂遺跡に墓域の存在理由を求めるとき、上志段味の墓域のプライオリティは山峰にある。これにしたがい本論は、尾張戸神社古墳、白鳥塚古墳の順で書き進めてきた。

3) 中社古墳、南社古墳

さて、東谷山山峰の墓域では、尾張戸神社古墳に続いて、前方後円墳の中社古墳が造営される。埴輪をもつため、白鳥塚古墳より後出となる。中社古墳には、二つの特質が認め

られる。第一に、山峰墓域における、円墳から前方後円墳への変化を体現したこと。第二に、山峰の地形の制約を受けて変則的な形状を結果しながら、しかし紛うことなき前方後円墳を造営しえたこと、である。これは、中社古墳の独立自存的なありようと言うよりは、やはり直前の時期の事態の投影を見るべきで、白鳥塚古墳を実現してはじめて可能となった、山峰墓域での前方後円墳造営であった。そして、尾張戸神社古墳より低所に位置するようすには、あきらかに後発の従属するさまが見てとれるが、墳形と大きさにおいて、その関係を転倒するところに、ローカリティでありながらトータリティという矛盾が、揚棄されぬまま、未分化なまま、継続しているように感じられる。

あるいは、上志段味の住人、長谷川佳隆よる昭和8年（1933）の所感に潜む調子は、正鵠を射たものと言えるのではないだろうか。それは、上志段味にバナキュラーな長谷川が、一方でトータリティをも生きたがゆえの、希有な本質直観だったように思える。

「一番大きいのは東谷山のあの頂上より少し下つた処に宝永山のやうに頂のみえるのが墳丘である。中権現といふ。すばらしいものであると指さされる。「頂上のなどは較べものにならぬ」といふ¹⁷⁾。

そして、南社古墳が築かれる。埴輪、葺石のようすから中社古墳より後出であり、立地もさらに低所となり、前の二墳に対する劣勢が顕著である。しかも、円墳であった。山峰墓域において、前方後円墳造営が中社古墳一回限りの体験となり、ふたたび南社古墳の円墳造営に帰すという、紆余曲折と言えるような変遷も、ローカルでありながらトータルを演出してきた山峰墓域の矛盾のあらわれとして理解するとき、了解可能となる。

たとえば、中社古墳の前方後円墳化には、白鳥塚古墳造営の論功行賞的意味があったのかもしれない。トータリティすなわち「尾張国全体」の表象を、ローカリティすなわち上志段味において担ったことに対しての——。しかし、トータリティの表象としての前方後円墳は、のちに山峰墓域を離れてゆく。その先触れが、南社古墳の円墳化であったのだろう。それはまた、対極的な時間空間の過渡としての山峰という危機、すなわち山峰墓域に所与のトータリティとローカリティとの矛盾の危機からの逸脱でもあった。

3. 東谷山西麓段丘の墓域と寺山古墳群

東谷山西麓段丘の墓域に目を転じると、白鳥塚古墳のほかに、寺山1号墳、同2号墳（馬捨場古墳）が知られている。これらについては、次のように書いた。

東谷山山麓では、白鳥塚古墳に後続する古墳として、その南に隣接する寺山古墳群をあげてよいかもしれない。白鳥塚古墳と寺山古墳群の立地する場所は、現在、大矢川の谷によって分断されているが、この川は、ここより南の谷に設けられた溜め池の余水捌けであるため、本来はひとつの古墳群である。戦後の記録によれば、寺山一号墳は直径二五[㍎]、高さ三・五[㍎]の円墳で、土採りの際に須恵器と直刀が出土したといい、二号墳は直径二二[㍎]、高さ二・五[㍎]の円墳で川原石の葺石があったという。しかし、昭和八年（一九三三）に、伊奈森太郎は、「白鳥塚の南に小川を隔てゝ、前方後

円が二つ並んでゐる。何れも大きく立派なものである」(伊奈森太郎・山村敏行「郷土資料をあさりて」)と、前方後円墳であったことを記している。これにしたがえば、白鳥塚古墳と墓域をひとつにした、同一の首長系譜にある前方後円墳だった可能性がある¹⁸⁾。

後段の伊奈森太郎の記述は、昭和8年(1933)2月13日に上志段味を訪問した際のものである。このとき伊奈は、短い時間であったが長谷川佳隆をたずねている。おそらく、長谷川の説明を受けて書いたのであろう。

その長谷川が、戦後(1952-1959年推定)に作製したとみなせる「愛知県古墳時代遺跡地名表 志段味」には、次のようにある。

名称	所在地	形状	大きさ	遺物	調査者	所蔵者	文献	現状	其他備考
(略)									
寺山古墳	大字上志段味字寺山	前方後円墳	不詳	直刀	祝部土器	長谷川佳隆			
	(個人情報省略—引用者注)		(空欄—引用者注)	殆んど旧形なし					
馬捨場古墳	大字上志段味	前方後円墳	高二間	祝部土器	曲玉耳環管玉	〃			
	(個人情報省略—引用者注)		(空欄—引用者注)	頂上に白珪石の葺石アリ ¹⁹⁾					

これによれば、伊奈の訪問から20年ほど経っているが、長谷川もまた、両古墳を前方後円墳とみなしていたことがわかる。

こののち「守山の古墳」の時代²⁰⁾を領導してゆく、久永春男ら野帳の会の人たちも、長谷川や伊奈の認識に接していたはずだが、両古墳を円墳として紹介した²¹⁾。以降、これが定着して、『名古屋市遺跡分布図(守山区)²²⁾』も踏襲してゆくが、『新修名古屋市史』で筆者が前掲のように伊奈の記述を再評価し、寺山2号墳の発掘調査報告も伊奈を引いて、同古墳の帆立貝形前方後円墳論が再興していった²³⁾。久永たちが、円墳とした理由はわからないが、実見して判断したとすれば、前方部が認識されなかったことになる。前方部が存在しなかったか、見出せないほどに脆弱だったことが考えられるが、発掘調査報告を見ると後者の印象を受ける。それにしても、伊奈や長谷川には認めることができたのだから、それ以後何らかの理由による亡失は、大いにうなずけるところではある。

なお、柴田常恵は、大正7年(1918)に上志段味をおとずれた際、自身の野帳の二箇所寺山古墳群に関して書きとどめている。一つは、「字／寺山、大塚／瓢形²⁴⁾」とあり、字寺山と字大塚の隣接する状況と、字大塚にある帆立貝形前方後円墳の志段味大塚古墳を記している。これは、項目を羅列したなかの一行であるため、聴きとり時のメモと思われる。そしてその7頁後に、「字／寺山 円塚 七八個²⁵⁾」の記述が見える。白鳥塚古墳の略図と東谷山の山峰・山麓古墳分布の略図のあいだに挿入されたこの一行が、視認によるものなのか、長谷川からの聴きとりによるものなのか、その双方なのか、不明である。字寺山だけに7、8基の円墳が存在した情報はほかに知られず、これが事実だった場合密集型の群集墳の印象を与えることになるが、違和感を禁じえない。二つの記述から推すと、7、8基とは、字寺山だけでなく字大塚を含む数字と見たほうがよいであろう。字寺山に関する柴田の情報は流動的であり、参考にとどめておきたい。

寺山古墳群については不明な点が多いとしても、論者の恣意以外に度外視する理由はない。現在知りうる情報を把持したうえで、本論では、長谷川、伊奈の観察所見に依拠し、同古墳群には少なくとも2基の前方後円墳があったとしておく。

かくして、寺山古墳群の2基の、「白鳥塚古墳と墓域をひとつにした、同一の首長系譜にある前方後円墳だった可能性」がもたらす意味は、西麓段丘墓域におけるトータリティの継続という点にある。白鳥塚古墳造営の契機となる集団が、山峰墓域を営んでゆくことに照らすとき、西麓段丘墓域では、それとは別の集団が造墓活動をおこなったのではないだろうか。機械的ではあるが、白鳥塚古墳以後の世代を考えると、山峰墓域で2基、西麓段丘墓域で2基と対応してもいる。

西麓段丘の墓域は、山峰の墓域を意識しているが、寺山古墳群の2基は、先行する白鳥塚古墳との関係で造営されたように見受けられる。段丘縁辺からやや入った場所にある寺山1号墳は、白鳥塚古墳の主軸を強く意識した立地が感じられ、白鳥塚古墳を主墳とする陪墳のような古墳だったかもしれない。寺山2号墳は、白鳥塚古墳から離れて段丘縁辺に位置するが、墳頂部に白色珪石の葺石を持つことが古くから知られ、発掘調査でも検出された。この事実を考慮すると、白鳥塚古墳のみならず、山峰の尾張戸神社古墳、中社古墳にも通じる。これらのことから上に記した別の集団とは、山峰を墓域とする集団がわかれた可能性よりも、白鳥塚古墳に連なる集団の印象を受ける。

ここまでを概括すると、次のとおりとなる。

- (a) 東谷山山峰の墓域：(b) にトータリティが偏した結果前景化するローカリティ。円墳と一回性の前方後円墳。白鳥塚古墳造営に参加しながら相対的に自立した集団か。
- (b) 東谷山西麓段丘の墓域：トータリティ。大型前方後円墳と前方後円墳の継続。白鳥塚古墳に同一または従属する集団か。旧稿に言う「同一の首長系譜」。

4. 東谷32号遺構

さて、上志段味における古墳分布の状況は、こののち大塚・大久手古墳群へ継続してゆくかのごとき様相を呈している。久永春男も、尾張戸神社古墳から勝手塚古墳へと観じていた。本論で析出した古墳群造営の論理が、大塚・大久手古墳群へ継続してゆくのか否か。継続してゆくなれば、それはどのようにして。継続しないのであれば、その理由はいかに——。課題は多いが、本論では、久永の成果を承けて、東谷山山峰墓域と東谷山西麓段丘墓域における活動が、大塚・大久手古墳群および勝手塚古墳、羽根古墳等に継続していったとする立場を採用するところから進むことにしたい。問題は、どのように継続していったのか、となる。

それに関連して、かつて提起した東谷32号遺構の検討を、ここでおこなっておこう。

そして、同様に注目されるのが、東谷三二号遺構である。これは、発掘調査の結果、古墳と認められなかったためこのように命名されたが、「尾張戸神社附近古墳分布図」（大場磐雄『神道考古学論攷』）では、東谷山山峰の古墳と同様な外見をした古墳と

して把握されている。その位置も、北西の方角からみた場合、白鳥塚古墳の上方に位置し、白鳥塚古墳との系譜関係を視覚的に示すには恰好の立地である。しかし、時期を示す遺物がないため、白鳥塚古墳との先後関係は不明とせざるを得ず、寺山古墳群とともに今後の検討が必要な古墳である²⁶⁾。

外見上からは古墳に見えるマウンドがあり、発掘調査をおこなうと、外表に葺石状の石やマウンド内に粘土が、断片的にはあれ認められながら、埋葬主体部や遺物を検出しないケースは、東谷32号遺構以外でも散見されてきた。古墳の施設や遺物が流出したものとみなされがちであったが、東谷32号遺構では、一步進んで古墳ではなかったと結論づけられ、「遺構」と名指された。その意味は何だったのか。

ここには、完成されなかった古墳という範疇が出来しているように思われる。築造は開始されながら、何らかの理由で中止され放棄された、未完の古墳である。これは、調査者が意図して提出したということではなく、明らかに外見上は人工の古墳として複数の人によってみなされてきたものが、発掘調査の結果、古墳でなかったときに想到する「理性」という意味における範疇である。東谷32号遺構が未完の古墳であった場合、どのように理解できるであろうか。

その立地は、尾根の先端であった。近傍では、笹ヶ根1号墳、同3号墳に類例がある。復原した直径は約30mで、南社古墳、東禅寺4号墳などに似る。葺石には川原石を用い、古くは南社古墳、新しくは東禅寺4号墳、松が洞古墳群に見られるものと通じる。以上から、東谷32号遺構は、木棺直葬または粘土槨、礫床等をもつ古墳の未完であった可能性が考えられる。ところが、西麓の尾根上に、これに類する古墳は、これまでのところ知られていない。前掲のように西方から見たとき白鳥塚古墳と有縁を呈することから、西麓段丘の墓域の造墓活動の延長だったのか。そうではなく、山峰を墓域とする造墓活動の延長だったのか。両者の統合だったのか。それらとはまったく別個に、新たな墓域を設定して開始されようとした造墓活動があったのか。複数の場合が想像できる。しかしここでは、そのいずれの場合であったとしても、中止されたこと、中止をもたらした造墓活動の再編があったことを想定するにとどめたい。そのかぎりであれば、白鳥塚古墳、寺山古墳群の後史において、大塚・大久手古墳群という新たな墓域が形成されてゆく事態とのあいだに不合理はない。

なお、調査以前、東谷32号遺構の南側裾で、剣と目される鉄製品の破片が採集されている²⁷⁾。古墳が実在し、埋葬施設が流出してしまった可能性は、依然としてある。東谷32号遺構が未完ではなく完成していた場合、新たな墓域が設定されたことは、未完の場合と同様に理解できるだろう。そして、小規模な横穴式石室墳がつくられるころまで²⁸⁾、この墓域で造墓が継起した形跡は見られず、墓域使用の中止が想像される。当初から、東谷32号遺構の造営のみで終わる墓域であった場合も、中止を予定する理論—計画の存在を考慮することにより、未完の場合に見た事後的な再編は、事前の編成としても理解可能である。

加えて、東谷32号遺構とは小谷を隔てた南100mほどの尾根先端にも、「尾張戸神社附近古墳分布図²⁹⁾」が東谷32号遺構と同様に「高貴ナルモノ」と記す無名墳があった。これもまた、古墳の外観を現前していたのであろう。これが未完だったのか完成していたのか、いまとなっては知る由もないが、立地、外観などから東谷32号遺構との類縁関係が感受さ

れ、東谷32号遺構と一体的にとらえてよいように思われる。その場合この2基も、前述した山峰と寺山古墳群の各2基と、世代的に対応するのかもしれない。

ところで、先の寺山2号墳も、発掘調査の結果内部主体が不明だったため、その流出だけでなく、「最初から内部主体をもたなかった可能性もある³⁰⁾」と言われていた。本論は、寺山2号墳の未完の可能性にも留意する。築造されながら未完となったことに、この古墳の意味が還元されるのではないだろうか。

さらにこのことは、東谷32号遺構の評価の際に引用された、松が洞古墳群のケースの考察にもおよぶ。報告書は、「古墳が墳丘のみで内部埋葬施設を有しなかった例としては、松が洞第10号墳と松が洞第11号墳がある」が、東谷32号遺構は「明確な墳丘を形成していない点で異なる³¹⁾」と書いていた。松が洞12号墳³²⁾も、外部施設、埋葬主体、副葬品が得られておらず、ここに加わる。

松が洞古墳群については、旧稿で「調査された以上の六基は、同一の尾根上に立地する古墳であるが、一―号墳と一二号墳の間には、古墳の認められない空白部分があるため、八・九号墳を盟主とする小集団と、一三号墳を盟主とする小集団の、少なくともふたつの造営集団があったと考えられる³³⁾」と書いた。これを参照すると、10³⁴⁾・11³⁵⁾・12号墳は、「一三号墳を盟主とする小集団」すなわち高位置と、「八・九号墳を盟主とする小集団」すなわち低位置の、二つの支群からなる同一尾根上の3墳であった。内外の施設と副葬品の質量において他を凌ぐ8号墳・9号墳を含む低位置の支群に10・11号墳があり、副葬品は得られなかったが明瞭な葺石帯と割竹形木棺の痕跡を有した13号墳³⁶⁾を含む高位置の支群に12号墳は存した。3墳の埋葬施設も、寺山2号墳で想定されたような埋葬施設の不在までを視野におさめれば、墓域の変動はともなわないものの、支群内の有力墳との関係による制約を想像できるのではないだろうか。

5. 大塚・大手古墳群、勝手塚古墳、羽根古墳

東谷32号遺構を直接に制約したのは、大塚・大久手古墳群であったと思われる。もちろん、両者のメタレベルが、想定されてしかるべきである。

東谷32号遺構と大塚・大久手古墳群が共通するのは、東谷山西麓段丘墓域後の新しい墓域という点にある。しかし、新しい墓域は、西麓段丘から東谷山側の前者へ移るのではなく、東谷山を離れる後者に結果した。想像をたくましくすれば、東谷山側すなわち東谷山山峰の墓域への接近——後述する東谷34号墳の体験からみたときの回帰、復古——の非選択と言える。ローカリティではなく、トータリティの延長において、墓域が形成されていったように見える。

事実、山峰の墓域における造墓活動は、南社古墳ののち東谷34号墳までおこなわれなくなる。では、山峰の墓域でおこなわれていた造墓活動はどこへ行ったのか。そこに、大塚・大手古墳群の複数性のゆえんがある。これは、次のように仮説される。

- (a) 東谷山山峰の墓域 → (A) 小さい帆立貝形前方後円墳
- (b) 東谷山西麓段丘の墓域 → (B) 大きい帆立貝形前方後円墳

白鳥塚古墳以降、未完の可能性も含め、前方後円墳を継起させた西麓段丘の墓域の造墓活動は、志段味大塚古墳、勝手塚古墳の「大きい帆立貝形前方後円墳」に継続していった。他方、円墳と一回性の前方後円墳を営んだ山峰の墓域の造墓活動は、東大久手古墳、西大久手古墳、大久手5号墳の「小さい帆立貝形前方後円墳」に続いていったと考えてみた³⁷⁾。これは、前の時期の活動規模の差異を順接的に反映させた理解だが、逆接する理由が見つければこのかぎりではない。また、西麓尾根上の2基、東谷32号遺構と無名墳造営集団の後裔が考慮されれば、(B)以外の大塚・大久手古墳群の古墳にいたるのではないだろうか。

再編は、各造墓活動の内部にもおよんでいる。西麓段丘の大型前方後円墳が帆立貝形前方後円墳となり、山峰の円墳と前方後円墳が帆立貝形前方後円墳となる。あたかも、降格や昇格のように見える事態が、出入りするかっこうである。旧稿では、先行研究を参照して帆立貝形前方後円墳に「規制」を読んだが³⁸⁾、本論の趣旨に即しあらためて概括すれば、トータリティもローカリティも、企画を同じくする帆立貝形前方後円墳の規模の大小に置きかえられ、より平準化されていったことに、その意味は還元される。何よりも、字大塚・大久手下のひと続きの段丘において墓域を同じくすることが、差異性の解消を訴えている。さらには、前期古墳時代的社會の終焉が、宣言されているかのようにすら見える。ここに、本章冒頭で触れたメタレベルの暗示もある。

そして、寺山2号墳に認められた未完とは、ここに位置づく事態だったのかもしれないことにも想到する。白鳥塚古墳のトータリティすなわち前期古墳時代性と、トータリティゆえに不断に生成されゆくポスト前期性との矛盾が、寺山2号墳を規定していたように思われるのである。換言すれば、白鳥塚古墳を契機墳とする字寺山の従前の墓域と、つぎにおとずれる字大塚・大久手下の新しい墓域とのあいだで引き裂かれ、あるいは宙づりになっていたのではないか、という疑問となる。

大塚・大久手古墳群は、トータリティにローカリティが従属する編成を見せる。そしてじきに、前者のトータリティは、勝手塚古墳として字大塚・大久手下の墓域を離れ独立してゆく。長谷川は、これに対しても「大和文化の高潮期に属する二重堀の前方後円式古墳³⁹⁾」として、本質直観していたようなのである。

「一番立派なのは大字前山にあるあの森をなしてゐる勝手神社の古墳である」と指を南にまはされる。「二重堀で、埴輪も三段にある。尾張には珍しいものである。
(略)⁴⁰⁾」

そして、この勝手塚古墳に、羽根古墳が続く。その立地の場所や単独に存在するありようは、あきらかに勝手塚古墳の延長を呈している。大正年間にこの古墳を発掘した長谷川は、戦後、次のように記していた。

| 名称 | 所在地 | 形状 | 大きさ | 遺物 | 調査者 | 所蔵者 | 文献 | 現状其他備考 |
(略)

| 羽根古墳 | 大字上志段味字羽根 | 前方後円墳 | 不詳 | 七鈴鏡大高杯子持高サ二尺櫛有ノモノナリ | 長谷川佳隆 | (個人情報省略—引用者注) | 県史 | 其形状全々ナシ⁴¹⁾ |

羽根古墳は、前方後円墳であっても一向に構わない。七鈴鏡や装飾須恵器などその出土遺物は、大型前方後円墳の白鳥古墳（名古屋市熱田区）のそれに通じる質を備えており、それらからは同墳が円墳になる理由を積極的には見出せないと言っても過言ではないのである。

6. おわりに

こののち、横穴式石室をもつ古墳が上志段味に展開してゆく。その再検討は機会をあらためることにして、最後に、東谷山山峰墓域の顛末について触れておきたい。

ローカリティとトータリティの矛盾のうちに展開した山峰墓域と東谷山西麓段丘墓域の造墓活動は、トータリティに偏するようにして西麓段丘南方の墓域へと移っていった。そしてローカリティは、時期がくんだり、古墳の意味も変わった段階になって、東谷34号墳をしてあらわしめることになる。この古墳については、次のように書いた。

遺物の示す時期、石室の形状からして、三四号墳は上志段味最後の古墳ということが出来るが、この古墳が、東谷山の西麓ではない東谷山山峰に築かれた点に注目したい。つまり、東谷山山峰とは、かつて尾張戸神社古墳、中社古墳、南社古墳が造営された墓域であった。東谷三四号墳は、すでに古墳としての視覚的な条件を失っていたにもかかわらず、これを造営した集団においては、前時代の三基との系譜関係を意識して、その地を選んだのではないかと思えるのである⁴²⁾。

いまでも、この理解に変更はない。その上で本論の主題に引き寄せて言えば、東谷34号墳は、トータリティよりローカリティに偏するよう見受けられる。山峰に立地することに、初発の動機たる東谷山山頂遺跡より来すトータリティの契機は皆無でないとしても、希薄な感が否めない。なぜなら、東谷34号墳の立地する標高は山峰墓域ではもっとも低く、尾張戸神社古墳、中社古墳、南社古墳に対する劣位は明白だからである。この態様には、トータリティよりも「前時代の三基との系譜関係」つまりローカリティに内在することへの傾斜が色濃く感じられる。それは、このときすでに、あらたなトータリティたる「尾張国全体」が、別の地、別の墓域で実現されていたからに相違ない。ほかでもない、庄内川下流の二つの超大型前方後円墳、断夫山古墳（名古屋市熱田区）と大須二子山古墳（名古屋市中区）である。トータリティにおいて、上志段味は後景化したのであった。それゆえに山峰墓域は、その性格をローカリティとして再現しえたのだ。では、そのような東谷34号墳が、なにゆえに営まれることになったのかという疑問がうまれるが、それについては群集墳の検討であきらかにされるであろう。

以上が、上志段味の古墳群、その羽根古墳以前に関する構造的考察である。これとは別の論理を要する歴史学的、物語的考察は、混同することなくこれより分離した。その結合は、他日を期したい。

注

- 1) 久永春男「結語」『守山の古墳』、守山市教育委員会、1963年、111頁。なお、本論における引用は、旧字体から新字体への改変、ルビの削除にとどめ、かなづかい、拗促音、句読点、地名、誤脱字などは原文のままとした。人名、組織名の敬称は省略したが、字体は統一していない。また、煩瑣を

- 避けるため、名古屋市守山区以外の遺跡所在地のみその行政区名を初出時に添えた。それ以外はすべて名古屋市守山区である。
- 2) これは、別稿で定義して用いた「中枢／衛星」に対応している。犬塚康博「遺跡と人の交通誌——名古屋市守山区大塚・大久手古墳群」千葉大学大学院人文社会科学研究科編『千葉大学人文社会科学研究』第31号、千葉大学大学院人文社会科学研究科、2015年、58-59・62頁、参照。
 - 3) 久永春男、前掲論文、111頁。
 - 4) 名古屋市教育委員会の「歴史の里」事業にかかる公金に基づく、一連の文化財行政に典型される。これに対する批判は、犬塚康博「経験と歴史の断絶——『志段味古墳群』の検討」千葉大学大学院人文社会科学研究科編『千葉大学人文社会科学研究』第28号、千葉大学大学院人文社会科学研究科、2014年、228-236頁、同「遺跡と人の交通誌——名古屋市守山区大塚・大久手古墳群」、48-63頁、などを参照されたい。
 - 5) 吉田富夫著・名古屋市経済局観光課編『名古屋のおいたち——見てまわろう名古屋の文化史——』、名古屋市、1969年、30-31頁。
 - 6) 真木悠介『時間の比較社会学』（岩波現代文庫 学術108）、株式会社岩波書店、2003年、102頁。
 - 7) 同書、55頁。
 - 8) 日本空間情報技術株式会社『東谷橋』（1:2,500／名古屋都市計画基本図／VII-MD 77-1）、名古屋市、2005年、同『上志段味』（1:2,500／名古屋都市計画基本図／VII-MD 77-5）、名古屋市、2005年、参照。
 - 9) 名古屋市守山区の遺跡分布調査を担当した岡本俊朗氏のご教示による。
 - 10) 犬塚康博「古墳時代」新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史』第1巻、名古屋市、1997年、451頁。
 - 11) 同「天白・元屋敷遺跡考」『私たちの博物館 志段味の自然と歴史を訪ねて』第66号、志段味の自然と歴史に親しむ会世話人会、2015年、9頁。
 - 12) 真木悠介、前掲書、107頁。
 - 13) 伊藤禎樹「東谷山をめぐる——庄内川流域における古墳時代の開始——」『美濃の考古学』第8号、美濃の考古学刊行会、2005年、40-43頁、参照。
 - 14) 同論文、43頁。
 - 15) 宮石宗弘氏のご教示による。（犬塚康博）「東谷山峰の遺跡」、志段味の自然と歴史に親しむ会5月例会資料、1990年5月27日、2頁。
 - 16) 東谷山の東側すなわち瀬戸市側には、火釜遺跡のほか東谷山南古墳が知られているが、これらを含めた同地域の考古学的状況の最新情報に接していない。別に稿を草して検討したい。
 - 17) 伊奈森太郎・山村敏行「郷土資料をあさりて」『愛知教育』4月号（「尾三文化史談」第4輯）、1933年、107頁。
 - 18) 犬塚康博「古墳時代」、340頁。
 - 19) （長谷川佳隆）「愛知県古墳時代遺跡地名表 志段味」伊藤禎樹「上志段味の古墳を考える」、志段味の自然と歴史に親しむ会2月例会配付資料、1996年2月18日、1頁。なお、表の項目「形状」は原文では記号だが、引用に際して文字に置きかえた。また「所蔵者」は、古墳の土地所有者のことである。この項目の個人情報省略した。
 - 20) 犬塚康博「遺跡と人の交通誌——名古屋市守山区大塚・大久手古墳群」、52-55頁、参照。
 - 21) 『守山の古墳』、40頁、参照。
 - 22) 『名古屋市遺跡分布図（守山区）』、名古屋市教育委員会、1980年、参照。
 - 23) 名古屋市見晴台考古資料館編『寺山2号墳発掘調査報告書』、名古屋市教育委員会、1998年、19頁、参照。
 - 24) 國學院大學所蔵柴田常恵資料、参照。
 - 25) 同資料、参照。
 - 26) 犬塚康博「古墳時代」、340-341頁。
 - 27) 伊藤禎樹「東谷32号遺構」『月刊マイタウン名古屋』第14号、ブックショップ「マイタウン」、1983年、8頁、参照。
 - 28) この所感は、「これをもって南部地区のすべてを推し量ることはできないが、少なくとも、東谷山西麓の緩斜面の古墳のうち、三二号墳（32号遺構のこと—引用者注）と第一二支丘先端の一基（本論で言う無名墳のこと—同前）を除く古墳は、二六号墳に類似するものだったのではないかと思われる」（犬塚康博「古墳時代」、446頁）と書いた。
 - 29) 大場磐雄『神道考古学論攷』、雄山閣、1971年、289頁。本図については旧稿で検討し、「林務課の東谷古墳群分布図」と呼んで用いた。犬塚康博「古墳時代」、436-448頁、参照。
 - 30) 名古屋市見晴台考古資料館編、前掲書、11頁。

- 31) 七原恵史「東谷第32号遺構」名古屋市教育委員会編『守山の古墳 調査報告第二』、名古屋市教育委員会、1969年、71頁。
- 32) 伊藤敬行・七原恵史「松が洞第12号墳」名古屋市教育委員会編『守山の古墳 調査報告第一』、名古屋市教育委員会、1966年、19-20頁、参照。
- 33) 犬塚康博「古墳時代」、358頁、参照。
- 34) 大橋勤「松が洞第10号墳」名古屋市教育委員会編『守山の古墳 調査報告第一』、16-17頁、参照。
- 35) 七原恵史・野中有善「松が洞第11号墳」、同書、18-19頁、参照。
- 36) 田中稔「松が洞第13号墳」、同書、21-26頁、参照。
- 37) 旧稿で筆者は、「勝手塚古墳は、白鳥塚古墳にはじまり大塚・大久手古墳群に至る系譜とは、別の系譜に属する古墳と考えることができる」（犬塚康博「古墳時代」、374頁）と述べた。今回の作業で指定した東谷山の墓域に関する仮説を介することにより、本論は旧稿とは別の考えを提示することになった。同じ理由で、上志段味の5基の帆立貝形後円墳について、前方部の形状の差異を根拠にした旧稿の系譜論とも、本論は異なる考えに結果している。
- 38) 同論文、375-376頁、参照。
- 39) 『守山市史』、愛知県守山市役所、1963年、60頁。同書で、引用文の著者は不明だが、長谷川佳隆であろうことを別稿で推定した。犬塚康博「遺跡と人の交通誌——名古屋市守山区大塚・大久手古墳群」、58頁、参照。
- 40) 伊奈森太郎・山村敏行、前掲論文、107頁。
- 41) （長谷川佳隆）、前掲表、1頁。
- 42) 犬塚康博「古墳時代」、447頁。

図説明

図1 名古屋市守山区上志段味古墳分布図（約1/11,764）

「1:3000 名古屋都市計画基本図 上志段味」、名古屋市、1964年（測図）（http://scr.wagmap.jp/nagoya_tokeizu/files/PDF/S39/002.pdf）、「1:3000 名古屋都市計画基本図 志段味」、名古屋市、1964年（測図）（http://scr.wagmap.jp/nagoya_tokeizu/files/PDF/S39/003.pdf）、を改変して作成。古墳の可能性のあるもの○で記入し、本文で登場する古墳だけ名称を添えた。ドットは墳丘の大きさを示していない。周濠、周堤は省略した。

図2 東谷山山峰の墓域図（1/5,000）

日本空間情報技術株式会社『東谷橋』（1:2,500／名古屋都市計画基本図／VII-MD 77-1）、名古屋市、2005年（http://scr.wagmap.jp/nagoya_tokeizu/files/PDF/H17/002.pdf）、同『上志段味』（1:2,500／名古屋都市計画基本図／VII-MD 77-5）、名古屋市、2005年（http://scr.wagmap.jp/nagoya_tokeizu/files/PDF/H17/005.pdf）、を改変して作成。

図3 東谷山西麓段丘の墓域概念図（約1/10,000）

「挿図第12 志段味地区古墳分布図」『守山の古墳』、守山市教育委員会、1963年、33頁、を改変して作成。「西麓段丘」「西麓段丘南方」の文字、寺山古墳群と東谷32号遺構と無名墳の記号を加筆した以外、古墳の指示は原図のままである。ほかに、次の加筆をおこなった。●●●：段丘崖、尾根裾など地形の変換するライン、●●●：標高54m等高線、●●●：標高52m等高線 ←：東谷池の谷のものと水系（想定）。加筆に際して、本文で言及した三つの水系は考慮の対象から除いた。

図4 東谷山山頂遺跡出土弥生土器（1/3）

1. 甕口縁部：台付甕と思われる。口縁部外面中位に斜行刺突列点文が施される。口頸部外面にタテハケが見られる。砂粒を多く含む胎土で、遺存した環境または二次加熱によるためか脆い。表面は明赤褐色、胎内は淡黄褐色を呈する。残存部が僅かなため直径、傾きともに参考の域を出ない。
2. 甕口縁部：調整痕、文様ともに見られず。胎土は1mm大までの砂粒を混じえ、遺存した環境または二次加熱によるためか脆い。外面は橙褐色、胎内は灰黒色を呈する。残存部が僅かなため直径、傾きともに参考に域を出ない。
3. 台付甕台脚部：つくりはあまり丁寧でない。胴部にタテハケ、胴部と台脚部の境外面に強いヨコナデ、台脚下半部内外面に指頭押圧痕が見られる。砂粒を多く含む胎土で、遺存した環境または二次加熱によるためか脆い。橙色を呈する。
4. 高杯杯底部：高杯以外の器種も考えたが高杯とした。内外面ともに平滑で調整痕は見られない。胎

土は若干の砂粒を混じえるものの、精選された印象を受ける。遺存した環境または二次加熱によるためか脆く、表面の剥離が進んでいる。外面は淡白褐色、内面は淡赤褐色で、胎内は淡褐色を呈する。残存部が僅かなため直径、傾きともに参考の域を出ない。

図5 東谷山山頂遺跡出土弥生土器(1)

左上：甕口縁部(図4-1)、右上：甕口縁部(図4-2)、左下：台付甕台脚部(図4-3)、右下：高杯杯底部(図4-4)

図6 東谷山山頂遺跡出土弥生土器(2)

左上：甕口頸～上胴部(図化不能)、左下：台付甕台脚部(内面、図化不能)、右：壺胴部(内面、図化不能)